

## 大バビロンと戦争中毒

～やめられない、軍備化と天皇制～

日本長老教会西武柳沢キリスト教会牧師  
星出卓也

序. 大バビロンとは

2.11 集会でありますのに「大バビロンと戦争中毒」とはずいぶん変わったタイトルだと思われたことでしょう。大バビロンとは、ヨハネの黙示録で出て来る繁栄と豊かさ、豪華さや力を求める社会を描いているものです。貪欲から貪欲に進み、富を占有しようとする社会や国を、大バビロンと言う言葉で表しています。ヨハネの黙示録 18 章 2-3 節に次のようにあります。

**「彼は力強い声で叫んだ。「倒れた。大バビロンは倒れた。それは、悪霊の住みか、あらゆる汚れた霊どもの巢窟、あらゆる汚れた鳥の巢窟、あらゆる汚れた憎むべき獣の巢窟となった。すべての国々の民は、御怒りを招く彼女の淫行のぶどう酒を飲み、地の王たちは、彼女と淫らなことを行ない、地の商人たちは、彼女の過度のぜいたくによって富を得たからだ。」**

大バビロンは「あらゆる汚れた～の巢窟」と言う言葉が三通りも重なって説明されている通り、大バビロンとしての社会や国の在り方は、神が定められた社会や共同体の在り方からかけ離れたものです。聖書は、人間が社会を築くこと、その社会の中に地上の権威がおかれることを神の御心によることとしていますが、そのような神が望む社会の在り方、地上の権威の在り方と、正反対の社会なのです。どのように汚れていて、どのように神が望まれる社会の在り方と違っているのかというと、一言でいうと「愛がない」「思いやりがない」のです。「愛」の代わりに「欲」であり「富」を占有しようとする飽くなき貪欲が原理原則です。創造主の代わりに金を礼拝する拝金主義、マモニズムが根底にあります。

我が家では、良く家族でボードゲームをします。皆が好きなゲームで、相変わらずえげつないなあと思うゲームは「モノポリー」というゲームです。モノポリーとは一言で言えば「独り占め」ということでしょうか。皆で競って、相手から財産を巻き上げ、最後に誰が皆のみぐるみを剥ぐか、剥がれるかを競うボードゲームです。毎回やるたびに、負けてみぐるみを剥がれても悲しい、勝って皆のみぐるみを剥いでも切なさが残る。そんなゲームです。単なるゲームだからまだいいとはいえ、冷静に考えれば考えるほど、恐ろしいゲームです。大バビロンは、競争して富を占有するだけでなく、一致団結して、弱者たちから富を巻き上げる社会の在り方です。黙示録の 18 章の 12 節以降に、大バビロンが商人た

ちにもたらした豊かな富の豪華目録が並んでいます「商品とは、金、銀、宝石、真珠・・・」とズラズラと豪華な品々がデパートのように並んでいます。しかしその目録の最後の商品を見て氷付きます。その目録の最後は「それに人のいのちである。」と結ばれるのです。いのちまでもが商品となる。これが大バビロンの恐ろしい社会の在り方を象徴しているものです。富を得るためなら、人を犠牲にしてもかまわない。いのちすらも商品の一つとなる。そこに「愛」も「思いやり」もありません。

社会や国家が肥大化して、傲慢になり、神をも恐れず、欲しいままを行う姿は聖書の至る所で語られながらも、ヨハネの黙示録が語る大バビロンのメタファーは、戦時下の植民地支配合戦の世界のみならず、「戦後」と言われる今日の社会をも映し出しているように思います。

## I. 「戦後」は本当に「戦後」であったか

私が西東京市の小さな教会の働きに遣わされたのは2001年。9.11の年でした。この9.11の出来事をきっかけに世界各国が軍備化にアクセルをかける様を目の当たりにしました。日本はその典型であったように思います。ただその頃の私が考えていたことは「戦後の社会が壊されて戦前へと変えられて行く」という危機感でした。

「戦後が壊される」という言葉には、1945年の敗戦から今までの日本は戦争がない平和な「戦後」であった、ということを前提にしています。私もそのように考えておりました。実は前の天皇、明仁さんも、いつも「日本は平和国家として道を歩んでまいりました」と繰り返し語っていましたが、安倍晋三氏も首相時代「平和国家日本」と語っていました。日本のリベラル層も、そのような前提を持っているように思います。

この「戦後」という理解は、ある意味では正しいとは思いますが。1945年から空襲はなくなり、徴兵もなくなりました。1966年生まれ私の普通の生活の中で、さほど実体験として戦争を見る機会はなく、テレビのドキュメンタリーや、雑誌に掲載されたベトナム戦争の写真に子どもながら衝撃は受けてはいましたが、人が死んでいるのは写真の中の世界であり、テレビの画面でしか見られない光景でした。

そのような「戦後」と言う観方を改めるように気付かされたのは、多くの方との交流を通してでした。私も日本社会に育った一人として、近代史に疎い者の一人です。その欠落は致命的な程であります。それでも多くの方との交流が、鈍い私を考えるようにと促しました。最初のきっかけは2010年。この年は「日韓併合」「朝鮮半島強制占領」から100年に当たる年でした。丁度この年にもNHKで「日韓併合100年」の特集ドキュメンタリーが生まれ、その内容は「帝国臣民」として徴兵され靖国神社に合祀された悔しさを背負う遺族たちの悲しみも取り扱う、非常にすぐれた番組でした。この数年前に実際にソウルに旅をして、堤岩里事件跡、1919年3.1独立宣言の宣言文が掲げられているパゴダ公園、クリスチャンたちにも神社参拝を強制した朝鮮神宮跡、日帝がひどい拷問をおこなった西大門刑務所を訪れ、その生々しい拷問の跡を見て卒倒したことも覚えております。しかし、

どうも私は想像力が欠落していて、「そのような痛ましい歴史があった」と過去のこととしか考えない感覚が鈍い人間です。たぶんあのまま 2010 年が過ぎ、「日韓併合 100 年」を終えて、2011 年の暦を刻んだら、もう次のテーマに忙しく追われて通り過ぎて行ったと思います。

そんな私を見て、北千住で牧師をしている金小益牧師は私に次のように語りました。「星出さんは、日韓併合 100 年だから、沢山のことを知ろうとしています。でもどうして歴史を学び、ソウルにまで訪問するあなたは、今ここにいる在日のことに目を向けないのですか。どうして彼らの人権も保障されない現実を、日韓併合から考えないのですか。海を渡って朝鮮半島に行く前に、今この日本で構造化された現実があなたの身近にあることに向き合わずに、どうして日韓併合を学んだことになるのですか。」

事実、1910 年から 1945 年までの 35 年間は朝鮮半島の歴史であると同時に、日本が占領した歴史です。土地収用から始まり、職を失った朝鮮半島の労働力が日本に徴用されて、やがては 1937 年の日中侵略の拡大から、強制徴用されていくようになること。そして 1941 年の太平洋戦争に至っては皇軍として徴兵されました。また従軍慰安婦という性奴隷として徴用された女性も強制徴用されて、日本が占領するアジア全域に送られました。その結果として、今、日本に 32 万人以上の在日の人々がいるのです。

私は、身近に朝鮮半島出身の友人にいないと思っていました。ところが多くの人々が差別を避け通称名で暮らしていて、多くの友人が実は在日二世、三世であると知るようになります。敗戦までは創氏改名は強いられたことでしたが、今は差別を逃れるため通称名使用を自ら余儀なくされる。これも植民地支配の影響が今も累々と社会に残っている構造化された事例の一つです。高校は右翼的などころがある私立学校で、「在日差別」用語が日常に出て来ました。大学生になり東京から大宮に通学する途中で当時の赤羽線（現在の埼京線）に沢山のチマチョゴリを着た朝鮮学校の生徒が乗っているのを見て朝鮮学校の存在を知りました。その後、朝鮮学校の生徒たちのチマチョゴリが切られる事件が起こり、女子生徒の安全のために制服を変えなければならなくなったことも聞いていました。しかし、これらの断片が鈍い私にはなかなか繋がらないのです。植民地支配の延長として、今も構造化された朝鮮半島にルーツを持つ人々の人権が保証されない現実があり、就職差別等、沢山の差別がある。戦争は過去の終わったこと、70 数年前のこと、という考えに支配されて、今現に植民地支配の累々と続いている構造化された問題があることに気が付かない。しかも、それらをあたかも存在しないかのように見ようとしなかったことに、改めて気が付かされた一つの事例です。

もう一つ、沖縄のクリスチャンたち、牧師たちとの 2015 年の交流でした。私はそれまでは、辺野古新基地建設の問題や、普天間基地などの在日米軍基地の問題を、ニュースが「沖縄問題」として取り上げるように「沖縄の問題」と考えておりました。確かに沖縄で起こっている問題なのですが、それは本土のヤマトが沖縄に押し付けて起っている問題だということに気が付きません。しかも私は「沖縄問題」を一緒に怒って日本政府を批判し

ているという善人であるかのような自分への理解なのです。基地を沖縄に押し付けているヤマトンチュウの牧師と、押し付けられて苦しんでいるウチナンチュウの牧師たち、という両者が出会っているという重大な意味に気が付きません。ウチナンチュウの牧師たちにとっては本当であれば会いたくもない人たちなのです。基地を押し付けて差別している側の人々なのです。それなのに当の私は、その痛みにも気が付かない。

この何とも言えないズレを埋めるために、沖縄の牧師たちは忍耐し、言葉を尽くして、理解できるように説明をしてくださいました。本土に踏みつけられた琉球処分の歴史は、廃藩置県の前、琉球占領から始まること。敗戦時にも捨て石にされ、敗戦後も捨て石となり米軍統治下に置かれ、それ以後も在日米軍基地を押し付けられて、そのように琉球処分の歴史は累々と積み重なって今に至っていること。直接会って、その事実を紐解かれて、悲しみと苦しみを負った人々と出会うまで、それらは私にとって「沖縄問題」で、いわば他人の問題であり、私が押し付けている加害者側にいることに気が付いていませんでした。

「在日」と「沖縄」の二つを知ることは、戦争が過去の終わったことではなく、今も沢山の構造化したものを生み出している連続していることだということに少しずつ気付くようになる大事なきっかけでした。1966年生まれの私が担っている戦争責任は、植民地支配によって今も構造化されて残っている現実を克服することと気付くようになりました。

「戦後、日本は平和国家として歩んできた」この言葉の嘘を沖縄の人はすぐに見抜きます。なぜならば、朝鮮戦争、ベトナム戦争、湾岸戦争、イラク戦争下で、この「戦後」と言われる間、在沖縄米軍基地から爆撃機が飛び立たない日はなかったからです。爆弾を大量に搭載した爆撃機が沖縄から離陸して、それを空にして帰って来る。そのような毎目を目の当たりにしている沖縄にとって、日々の日常は「戦時下」そのものでした。確かに、かつての空襲のように日本本土の上に爆弾は「戦後」と言われているこの76年間落ちていません。本土決戦もありません。しかし、朝鮮戦争、ベトナム戦争、湾岸戦争、イラク戦争にて、在日米軍基地を提供すること、思いやり予算をはじめ、日本の多大な協力なしには、米国はあれほどの戦争を行うことはできませんでした。その意味では、紛争地に沢山の爆弾が降り注いだ戦争遂行に日本は多大な貢献をしてきました。

私は1966年生まれ、高度経済成長と言われる時代に生まれ、育ちました。裕福とは言えなくとも飢えてはおりません。学校にも行かせてもらえました。そんな環境で育ち、私は日本が平和憲法下で戦争のない平和国家だと思っていました。ところが「戦争がない」という意味は、自分の頭の上に爆弾が落ちていない、ということであって、実は日本は他の国の人々の上に爆弾を落とすことに貢献し、その軍事特需を得て経済成長をしました。その意味では、他の国の人々を犠牲にして豊かになり、戦争に加担した「戦後」を歩んだということになります。米軍の戦争に日本は一貫して協力し続け、逆に経済成長してきたのですから。その意味では日本の「戦後」の歩みは「平和国家」ではなく、米軍の戦争に

貢献し続け、しかもその恩恵によって経済発展した戦争国家と言う方が正しかったのではないかと気付くようになりました。

## II. 戦後高度経済成長の実態

私は、自分が生まれ、生きて来た「戦後」というものの正体を、あまり正確に知っていないのだということに気付かされて、自分が生まれ、生きて来た時代を知る必要があると思うようになりました。自分が置かれた時代を「平和憲法下の平和国家」と宣伝された言葉を鵜呑みにして、その実態を正確に知ろうとしないならば、この時代に私を置かれた神に対して正しい応答ができないと思いました。

教会の 2000 年の歴史も先達が、彼らの生きた時代の中で神の言葉に答えようとした様々な軌跡は、後世の教会が共に受け継ぐ財産として残っています。そのように、私もまた、今の時代に対して神のことばに答えようとするのであれば、私が今置かれている「戦後」と呼ばれているこの時代を、正確に知る努力をすることが、神に応答をする上での大事なことだと思うようになりました。私が生まれ、育った高度経済成長という時代を正確に把握するために、特に日本が米軍の戦争に協力した、戦争との関係で、その実態を知ろうと思いました。

手始めに、日本が占領統治した朝鮮半島のその後について、調べ始めると様々な日本の「戦後」と言われるものの実態が分かってきます。代表的なものを三つ挙げます。

### ① 敗戦処理の分割統治は朝鮮半島に

ソ連がヤルタ会談の米・英との合意に基づいて 1945 年 8 月 9 日にと日本に宣戦布告した、というのは有名ですが、宣戦布告と共に進出したのは日本の傀儡国であった満州国と占領統治していた朝鮮半島でした。そして 8 月 10 日から 11 日の間に「北緯 38 度線で暫定分割する」（現在の 38 度線とは少し違う）という案が提案されて、8 月 17 日に合意され、朝鮮半島の分割は 8 月 17 日に決まります。

不思議に思ったのは、敗戦国は日本なのに、なぜ占領から解放された朝鮮半島が、敗戦国ドイツのように分割されなければならなかったのか、ということです。本当であれば、日本が敗戦国なので、静岡あたりで東日本と西日本と分割されて、ベルリンのように、東京も東東京と西東京に分割される可能性もあったのです。しかし、そうはならず、解放された朝鮮半島が分割対象となり、戦後処理のしわ寄せを、日本が受ける代わりに朝鮮半島が受けたこととなります。

### ② 戦時下の独裁体制と軍事政権は、韓国で継続

日本では、1947 年に日本国憲法制定が制定され、治安維持法のような民主化にそぐわない法は廃止となります。ところが、韓国では、治安維持法と同じ役割を持つ「国家保安法」が 1948 年に制定、早速、同年 12 月に同法は済州島での住民弾圧に使われることとな

ります。日本は法制度においては民主化されるが、軍事独裁体制は韓国に受け継がれ、民衆弾圧が行われます。

### ③ 朝鮮戦争の軍事特需で日本の軍事産業が復活

朝鮮戦争は1950年6月25日早朝に始まります。38度線を越えて侵略を始めたのは共和国側ということになっています。しかし朝鮮戦争の結果、巨大な利益を産み、軍事産業が大きく発展したのはアメリカであり、日本でもありました。朝鮮派遣米軍司令官ヴァン・フリート中将は、開戦直後に「朝鮮は一つの祝福であった。この地か、あるいは、世界のどこかで「朝鮮」がなければならなかった。」と語りました。評論家I.F.ストーンは『秘史・朝鮮戦争』の著書の中で、当時の「アメリカの政治・経済・軍事上の考え方の支配傾向は『平和の恐怖』であった。」と書いています。その通りに、朝鮮戦争は「死の商人」である兵器産業にとって不景気から逃れ出る救いの道、「祝福」だったといえます。アメリカ経済は1949年から恐慌が起こっていました。

それが朝鮮戦争をきっかけに米軍総兵力145万8千人が220万人に増加し、さらには400万人の目標が立てられました。朝鮮戦争前に立てられた国防予算1950-51年度は135.5億ドルでしたが、戦争の始まりと共に155億ドルに上昇し、更に同年7月に105億ドル、8月に11億ドル、12月に168億ドルの追加が承認され、合計440億ドルとなります。その他、対外軍事支援費52億ドル、原子力10億ドルを加えると500億ドルを越えます。ハーパーズ・マガジン誌は1954年6月号で次のように書きました。「繁栄が欲しければ、戦争をやるんだ。これがいつものアメリカ的な方法だったのだ。繁栄のための戦争を。これは単に経済の問題に過ぎない。単に経済の。」

日本において1950年度一般会計予算の中で、国債償還費が723億円も予算化されていました。その年度に返済する国債額は80億円程度なのに、その9倍もの予算が組まれていました。しかし、朝鮮戦争が始まり、マッカーサー元帥の一声で、警察予備隊が組織され、この200億円が国債償還費から朝鮮戦争にそっくり予定されていたように支出されます。不思議なことにその前年の1949年に「下山事件」「三鷹事件」「松川事件」という日本の黒い霧がたちこめ、それを契機にレッドパージ、在日朝鮮人連盟の閉鎖、日本共産党の非合法化、デモや集会の禁止が行われ、そして間もなく朝鮮戦争が始まります。

朝鮮戦争と共に「朝鮮景気」「特需景気」が神風のように吹き、輸出品財貨600-800億円はすぐになくなり、日本の船舶の半分は港で寝ていたのがフル稼働に。軍需特需は月平均100億円にまでなります。

最初は土嚢や有刺鉄線、ナパーム弾用タンクの納入から、セメント、ドラム缶、石炭、自動車部品に広がり、やがては迫撃砲、砲弾、ロケット弾と、完全に兵器に移行していきました。受注したのは、ほとんどの一部上場企業。その内の多くが以後も自衛隊に受注を得ることになります。

また朝鮮景気で一番利益に与ったのは、旧財閥系大手でした。中日本重工（旧・三菱重工）、富士工業（旧・中島飛行機）、川崎機械、日本製鋼、東日本重工、かつての戦争経済で巨万の利益を挙げた会社の復活です。やがてこれらの会社は、自衛隊から安定した巨額な受注を得ることとなります。

### Ⅲ. 大バビロンと戦争中毒

これらの事例は、高度経済成長が、朝鮮半島の多くの死者や、戦火とともに急拡大したものだということ。日本の繁栄は、ある種血塗られた経済発展でした。それは他者の苦しみを足台に、新たな死の商人の復活を中心にもたらされたものでした。

その意味では、戦争で巨万の利益を受けた日本経済界全体が「死の商人」化したとも言えます。日本の「戦後」と言われる構造は、まさに大バビロンの様相を呈していたと言えるでしょう。「平和国家」の宣伝の名のもとで、その実態は、日本中が死の商人の恩恵をあずかった、高度経済成長の始まりました。

ハーパーズ・マガジン誌が書いた言葉は、アメリカ社会とともに、その後の日本社会の「戦後」と言われる道のりを言い当てるものとなりました。

「繁栄のための戦争を。これは単に経済の問題に過ぎない。単に経済の。」

大バビロンは、貪欲から貪欲に進み、満足することない、果てしない利益を求める泥沼となるのが特徴です。繁栄を求めたローマ帝国と帝国下の社会がそうでした。巨万の富を求めて、破滅にまで進む。それは破滅を迎えるまで止めることができない依存症状態となります。

軍事特需が過ぎると在庫が溜まります。その在庫を処理するために、また新たな紛争地を探し、消費先を探さないと、その経済は成り立たなくなります。かくして戦争中毒の構造が出来上がって行くのです。パチンコ依存症が今日、深刻な事態となっていますが、一度スロットル等で大当たりすると、その時の興奮と快感が、頭にしっかりと記録されて、いつでも大当たりの快感を求める依存症になるようです。戦争中毒も同じで、一度これほどの巨万のもうけを手にとると、もうやめられなくなって行くのです。次から次へと戦争を求め、紛争を探して、その結果得られる巨万の富を探し続ける依存症状態になります。その欲望は満足することを知りません。

### Ⅳ. 大バビロン内の天国と地獄

朝鮮戦争を契機に、異常な景気拡大を迎えた日本経済は 1950 年の GDP 3 兆 9470 億円から 12 年後の 1962 年には 22 兆 2830 億円に拡大します。GDP は 12 年間で 5.6 倍に成長したこととなります。ところがこの 1962 年に中小企業の倒産が増加を始めます。GDP はその後も上昇を続け、景気は高止まりを続けている中で、大手企業の下請け企業を中心とする支援打ち切りや、下請け企業の再編によって破たんする会社が続出します。支払い

条件を厳しくされ、大手企業によって息の音を止められたものが多いのです。会社倒産による自死も増えました。

なぜ大手企業や親会社は、冷酷に中小企業を切り捨てたのでしょうか。1964年11月5日に経済審議会の「中期経済計画案」の中に、「低生産部門の近代化」の項目があります。雑貨品や鉱産物の一部のように、日本国内で生産するのが適さない分野、つまり海外の安い労働力での生産と競争が保てない分野や、生産性の向上が期待できない中小企業は、生産資源の効率的利用や低開発国との国際分業の観点から、その転換を図る必要がある、と書かれています。つまり、大独占体のもとに生産を集中し、重化学工業化を推進するためには、中小企業の存在が邪魔になるということです。もう一つは、低開発国から一定の物資を日本が買う必要に迫られているため、これらの輸入品と競合する日本の中小企業を整理してしまおうということです。日本の大企業を中心とする独占体は、効率化の実現のために、政府と共同で、中小企業の淘汰を推進したのです。景気が拡大し、GDPが上昇する中で、弱肉強食はますます熾烈になったのです。

切り捨てられるのは中小企業だけではありません。農家も対象となりました。「中期経済計画案」の中に、年2%農家を減らすとあります。具体的には大規模農業の規制を緩和し、中小農家を減少させる方針です。そのため、貧しい農家は廃業を余儀なくされ、中小企業の就職先がない中に、転職を求められて行くようになりました。まさに肥え太る経済大国の中で、切り捨てが進んで行ったのです。

まさに繁栄し拡大する景気の中で、ますます困窮し、切り捨てられる人々が比例して増加して行ったのです。

大バビロンは「愛」や「思いやり」とは対極にある社会として描かれます。欲や利益が最優先課題で、人のいのちさえも犠牲になる。「戦後」と言われる日本社会は、確実に大バビロンとしての道を進んで行ったのです。

より多くの富を得ようと、市民、王、商人が一体になる大バビロン。ところが、みんな豊かになって、みんなが良い、とはなりません。金が優先、富を得るのが優先ですから、常に利益獲得の犠牲者が生まれるのです。必ず誰かが富む反面、他の人々は貧しくなる。飢えるようになります。モノポリーのように身ぐるみを剥がされる人々が出る社会となるのです。

ブリューゲルの絵画「バベルの塔」はとても有名ですが、高く聳え立つバベル塔の下方に、踏みつけられ、倒されている人々が描かれています。巨大な塔の建設の大事業の裏では、踏みつけられ、搾取される人々が生まれ、犠牲となる人々の存在なしには、この様な巨大な塔は建てられるはずもなかった、と言うメッセージを描いています。繁栄の帝国の中に、巨万の富を得る人の影で、極貧の人を生み出す社会。それが大バビロンなのです。



## V. やめられない天皇制

軍備化が、巨万の時をもたらす構造を、朝鮮戦争下の戦後日本の姿から見て来ました。財界や政府だけではなく、より豊かに、より豪華に、より快適にを求める民衆が、富を求めるゆえに、人が踏みつけられ、殺され倒され犠牲になる人を顧みない社会を、大バビロンは描いていました。

それと同時に、繁栄を神とする社会は、ますます創造主から離れ、自分の都合の良い繁栄をもたらす神を慕い、礼拝するようになります。繁栄をもたらす神を礼拝すればするほど、ますます人は貪欲から貪欲に進み、欲と言う神に仕えるようになります。カナンの人々が礼拝したバアルは豊穡の神、繁栄をもたらす神です。民は繁栄を求めれば求めるほど、富をもたらす象徴をますます求めるようになりました。

近代天皇制は、常に時代と共に変わってゆく側面と、変わらない側面があります。常に変わらない側面としては、国民統合の機能です。どのように統合するかは時代によって変わりますが、常にバラバラな民衆を一つのアイデンティティーに統合しようとする役割は、戦前も戦後も変わらないものです。戦前のような大権も統帥権も戦後は無くなり、「象徴」と言う曖昧な地位は残りましたが、日本国民としての人々が求めるモデルを示そうとする象徴の機能は、戦前同様に、いやそれ以上に強まっているように思います。

先の天皇が確立した「明仁モデル」の特徴は、日本国民の大衆が考え、理想とし、目指すべき有り方を、自らの行動と言葉と、振る舞いと態度を通して具現化するというものです。天皇が行う行為、振る舞い、ことばを通して、日本国民が目指すべき理想を表し、国民の道徳の柱として、国民の理想とあり方を指し示す、というものです。そのようにして天皇は、国民の価値観の中心的な存在となり、そうして国民の理想や目指すべき有り方の中心となる、というのが明仁モデルです。

そのため明仁さんは、ご老体に鞭打ち、努力に努力を重ね、思いやりの姿は現しました。被災地にも積極的に訪問しました。しかし、天皇が訪問し、思いやりの言葉をかけることによって、多くの方は問題が解決したと受け止めます。しかし、現実は何も変わりません。明仁が帰った後も、被災地の状況は変わりません。日本社会の犠牲に追いやられて行く人々の現実は、何一つとして解決していないのです。しかし、その犠牲を強いている大多数の人々は、その姿を見て、一応の解決を迎えたと思うのです。ここに大きな問題があるのではないのでしょうか。

天皇が行っている行動、言葉、振る舞いが、どれほど真摯なものであり、いたわりに満ちたものであったとしても、現実は何一つ変わりません。明仁は戦跡を訪問し、亡くなった方、戦争で殺された方の追悼を行いました。大多数の日本社会からそのことを大変評価されております。ところが、彼は「殺された方の苦しみを覚え、痛む」と語りながら、軍の統帥権を持って一番その責任を負っていた自分の父親の罪責を語ることはありません。「歴史の反省」と語りますが、自分の家族が負いきれない罪責を負っていることには言及しません。つまり罪責なき反省なのです。

オバマ大統領が広島に訪問し、原爆投下の記念日にアメリカ大統領として追悼の言葉を語ったことは、画期的なことであったかもしれません。しかし彼の口から大統領として謝罪の言葉はありませんでした。平和を望む立派な演説をしたかも知れませんが、「天から火が降ってきた」と語った違和感は拭えませんでした。平和を求める言葉は極めて立派、態度も立派。しかしそこに責任を負った者としての謝罪は無く罪責もない。その演説が立派であればあるほど、きれいごとに聞こえました。その言葉は原爆の投下を決断した政府の大統領として罪責を負った悔い改めがない言葉。すべてを知られ、全てを裁かれる神の前にこの人は立っているのだろうか、と疑うような、ある種「義人」の立場に身を置いた言葉のように思います。「義人」の意味は、自分を正しい者としての側に置く義人の意味です。聖書の基準に従えば、それは本当の義人ではありません。神の義に生きる者は、神の前に自分の罪を告白し、悔い改めます。同じく明仁さんの立派な言葉は、神の前に悔い改めず、自分を正しい側に置く「パリサイ人的な義」を感じます。

これは天皇だけの問題ではありません。歴史の責任は日本の市民が負っていることです。天皇の戦争責任は当然のあるとしても、天皇だけが責任を追及されるだけではなく、全市民が戦争に協力し加担し、侵略加害の罪責を負っております。しかし天皇の訪問によって罪責ではなくいたわりの言葉によって、決着が付いたと、大多数の日本の市民は考え

ます。歴史修正をする人に対して、明仁さんの振る舞いは立派なのでしょうか。結果として日本社会が歴史に向き合い、自分の罪を自覚し、謝罪し、真摯に侵略加害の責任と向き合うことから遠のかせているのではないのでしょうか。明仁さんがいたわりの言葉を宣べて解決した、と日本社会が判断するなら事実上そうです。何一つ罪の自覚なしに、謝罪なしに解決したことにする。

天皇の行動自体は立派に見えても、その立派な行動は、必ず何かを隠す役割を果たしているように思います。日本社会に対して大事なことを見せなくする役割を果たしている立派な行動のように思います。

天皇が「戦後日本は平和国家として平和と繁栄を歩んできた」という言葉もそうです。リベラルと言われる多くの言論人や政治家も、同じく平和国家の自負を持っているように思っています。つまり明仁さんの言葉は、日本のリベラルを代表する価値観を語っています。

しかし、この言葉は、日米軍事同盟の現実を覆い、日本はアメリカの戦争に協力し、貢献し、援助し続けた責任、他の国が爆撃される中で利益を得て来た責任を隠しています。「戦後」と語りながらも、1945年以降は世界中で戦争が止むときはありません。朝鮮戦争、ベトナム戦争、湾岸戦争、イラク戦争、アフガニスタンでの戦争。この全てに日本は決定的な役割を果たし、そこからむしろ特需を受けてきました。その結果、朝鮮半島、ベトナム、イラクの上には、爆弾は降り注ぎ続けました。それを隠す象徴としての振る舞いは、やはり真実から人々を遠ざけ自分の責任を見ないようにする、都合の良い象徴、悔い改めない日本社会の理想なのではないのでしょうか。

日本社会の理想を体現する象徴、しかしその理想は、重い責任を担うことから回避させる都合のよい理想。戦後の「繁栄」の正体が、人の犠牲の上にある血塗られた犠牲であることに向き合わずに済む理想。悔い改めに向き合う重い課題を帳消しにしてくれる便利な偽りの理想を人々は求めているように思います。

## VI. 大バビロンから出て行く

ヨハネの黙示録 18 章 4 節には次のように語ります。

**「それから、私は、天からもう一つの声がこう言うのを聞いた。「わが民はこの女の罪から関わらないように。その災害に巻き込まれないように、彼女のところから出て行きなさい。」**

「大バビロンのところから出て行く」とは、具体的にどうしたらいいのでしょうか。繁栄の都会から田舎に引っ越すことでしょうか。田舎に引っ込んだところで、繁栄を求めなくなるわけではなし、貪欲に生きる生き方を辞めることとは無関係です。ここで言っている「離れる」とは、物理的な移動のことではありません。むしろ大バビロンが誘っている誘惑、豊かさを求め、お金の依り頼む拝金の生き方。必然的にそれは貪欲に生きる生き方、そのようなものを求めるありかたから離れ、決別し、全く別な価値観に生きること。

それがここから逃れるように、と語っているものです。大都会の中に生活していたとしても、大バビロンとは全く違う、異質な、悔い改めと罪責を負い、犠牲になる人々の痛みと共に生きる、主が歩まれた道に生きることを命じています。

ヨハネが生きたローマ社会も今日と同様に格差社会であり、弱肉強食の世界であり、富の占有と共に多くの弱者を犠牲にする社会でした。人よりもより多くの富を得ようとする競争社会であり、その結果富める者はますます富み、貧しい者はますます貧しくなる社会でした。帝国の首都ローマだけではなく、ヨハネが生きた小アジア大陸の大都市もまた、そのような貧富の差が広がる格差社会でした。その中であって、主の教会が目をつけていた視点は、貧しくされ、抑圧された人々の痛み立ち、共に生きようとするものでした。

三世紀のデキウス帝の大迫害の時、キリスト教会は大きな迫害に苦しみ、貧しくなりました。しかし貧しい状態に留め置かれた彼らが、教会の教職者だけではなく、やもめや孤児たちを支援していました。しかもローマの教会は1500人ものやもめの世話をしていたという事実に驚きます。これは当時のローマの教会が豊かだったからではなく、むしろ貧しい立場に立っていたから、貧しい人々の痛みと共に共感できたのだと思われます。人々の痛みと共に生きる教会として導かれた帰結であると思われます。繁栄を求め、富をより多く獲得することを求めるローマの格差社会であって、その中に生きた主の教会が目指したのは、ローマ社会が追い求めたものとは正反対のもの、隣人を愛する生き方でした。貧しい立場に身を置いたからこそ隣人の痛みを理解できたのではないのでしょうか。

18章4節の「この女の罪に関わらないように」とある「関わる」という言葉は、コイノニアという言葉です。交わりを意味する言葉です。罪との交わりとは具体的には、繁栄を追い求める人々と同じように生き、その生き方を共有する、ということの意味しています。むしろそのような生き方に交わず、その生き方から離れ、そのような生き方とは異質な、隣人を愛する生き方、つまりは困窮の中にある人々と共に行き、苦しむ人の痛みを分け合うこと。それこそがここで「この女から離れる」という意味であると思われます。世の人々を主が愛された人として愛しながらも、世の生き方に歩まないことです。

デキウス帝の時代に、財産の没収を求めたローマの官憲に対して、ローマの教会の執事ラウレンティウスは「教会の財産は貧しい人々です」と答えました。これはローマに生きる教会にとって、貧しい人々と共に生きることは主から受けた恵み、神の愛を学ぶ宝だったのです。だからこそラウレンティウスはこの貧しい人々こそが教会の財産です、と心からそう思って答えたのです。その意味が官憲には理解ができませんでしたが、それが当時のローマに生きた教会が見た視点であり、生き方だったのです。その追い求めたものは、大バビロンが追い求めさせようとしていたものとは全く違う異質な世界でした。富に信頼し、より富を追い求めようと貪欲に生きる生き方ではなく、貧しい者たちと共に生き、主から委ねられたものを分け合う、これこそが隣人を自分自身のように愛する生き方を現すものだったのです。

4節の「その災害に巻き込まれないために」の警告の言葉は聞かなければならないものです。大バビロンのような生き方は、神の審判を免れるものではありません。必ずやそのような生き方に神の怒りは下ります。その時に神に裁かれる主の民とならないように。この警告は大バビロンの中に生きる主の民に向けて警告を呼びかけているのです。

現代は、ヨハネが生きたローマ社会とはけた違いのスケールで格差が広がっています。朝鮮戦争の1950年代よりももっと大バビロン化は深まり広がっています。そのような格差社会の中で富める側に身を置こうとする教会も、大バビロンの生き方に染まる教会も、大バビロンが滅びる時に、共にその災害に巻き込まれる、と語るのです。そのような教会が追い求めたものは大バビロンと共に無に帰し、彼らが努力して追い求めたものともに無に帰すのではないのでしょうか。どうせ労苦するなら、永遠に残るもののために労苦したいではありませんか。

今日の大都市に生きながら、そこが発信している生き方に染まらず、むしろその生き方とは全く異質な、主の愛に生き、隣人愛の生き方に生きる、「教会の財産は貧しい人々です」と語ったラウレンティウスが見た世界を見る、そのような教会として生ることが、この女から離れるということではないのでしょうか。

## 補足・ヨハネの黙示録の全体構造

ヨハネの黙示録は、ある期間のことを繰り返し、繰り返し語っています。そのある期間とはキリストの初臨からキリストの再臨までの期間です。つまりこの期間の中に1世紀末の教会も入っていましたし、この21世紀に生きる私たちもはいています。キリストの初臨から再臨。この同じ期間の性質を何度も何度も黙示録は繰り返し、章を追うごとに語っています。

同じ期間のことを繰り返し語るのは、同じことを単に繰り返すことではありません。この期間を、ある視点で描き、また次の段落では、その同じ期間を別な視点で描く。取り扱われる期間は、キリストの初臨から再臨前の、全く同じ期間ですが、全く違う角度から、段落を追うごとに、章を追うごとに違う視点で同じ期間のことが描かれて行きます。

例えば、良く国家権力が肥大化し、神としての礼拝までも要求するというを描く、有名な黙示録の13章があります。第一の獣とは、地上に神によって置かれた地上的権威が、神としての地位を要求し、その礼拝を要求し、拒む聖徒たちを殺すことまでも許される、という恐ろしい描写です。

これは1世紀の教会が直面していた現実でした。ローマ皇帝にいけにえをささげること。つまりカエサルの権威を神と同等絶対のものとし、礼拝をささげること。この一点を受け入れれば、ローマ帝国は寛容政策を取った。ところがこの一点に従わない者は徹底弾圧した。まさに13章は1世紀末の教会が直面した現実でもありました。

同時に、このことは1世紀に限らず、あらゆる時代に繰り返し起こることです。形を変え品を変えて、地上の権威が神としての権威を主張する事態はいつの時代にも起こりました。これはある時代だけの限定の話ではなく、主の教会が再臨の時まで向き合う普遍的な課題です。

さて、13章の恐ろしい描写から、14章に進むと、様子が一変します。そこには神の選びの民が勝利の歌声を上げる描写が描かれています。13章の恐ろしい描写とは一転して、主の聖徒たちの勝利の情景となります。13章と14章は、あまりにも様子が違うので、13章は苦難の時代、14章は勝利の時代、というように、違う時代を語っている、という説明をする方もいます。しかしここも、同じ期間のことを、違う角度で語って、同じ現実を違う角度から見ているものです。

ヨハネの黙示録の全体が、同様なのです。キリストの初臨から再臨までの同じ期間を、繰り返し、違う視点で語る。ウィリアム・ヘンドリックセンはその著書『勝ち得て余りあり』の中で、この黙示録の構造のことを、「発展的並行」と呼びます。

黙示録は全て1章から20章まで、時系列順に配列はされてはおりません。むしろキリストの初臨から再臨までが繰り返し表現されています。何度も最終的な審判の描写が繰り返されているのはそのためです。また最後の21章以降においては、それが突き抜けて、

神の創造された世界が完成した後の、新しい天と地についてを語るという構造になっています。

20章の千年王国が、キリストの再臨の前か、後か、いや千年王国などないのか、ということ巡って膨大な論議がなされていますが、これもこの全体構造から理解すると、やはり同じく、キリストの初臨から再臨までの、つまり私たちが生きているこの時代を含めてのあらゆる時代の主の教会の描写であると思われます。全然今は王として治めていない、と思われるでしょうか。この王としての統治も、地上の権威のようなものではなく、主のみ言葉に従う私たちの労苦は、やはりキリストの国のみ言葉に従うキリストの王としての統治に、聖徒たちもまたキリストと共に治める王として与っていることなのです。この地上において、いつも主に従おうとする私たちの歩みは、苦難続き、忍耐続き、挫折と後退を繰り返す、とても王としての支配には見えないように思われますが、御国の支配のために労苦し忍耐するそのような歩みは、まさにキリストと共に王として治めるものなのです。この王としての支配を、地上の王権のレベルで捕えることはできません。

このことは主の教会が与る御国の支配と共に、その戦いと勝利の性質を現しているものでもあります。先ほどの黙示録13章においては、聖徒たちは殺され、打たれ、敗北しているようにしか見えません。それが、血肉の戦いであるなら、敗北なのですが、彼らが闘っている戦いは血肉のものではなく霊的な戦いです。死に至るまで主に忠実である、という主への服従が問われている戦いです。つまり彼らが殺されたということは、死に至るまで主に忠実であったということです。霊的な戦いにおいて世に勝ったということです。

黙示録13章は、困難の只中にある民に、彼らが尚、主に従い続ける励ましを送り、獣の支配の中で、決して獣を恐れてはならず、獣の上におられる神とキリストをこそ恐れるべき根拠が、13章には要所要所にちりばめられています。「獣に～の権威が与えられた」と言う「与えられた」という受動態の言葉が繰り返されていること。「与えられた」と受動態で語るのには、与えた方がいるということ、それはサタンではなく、神です。つまり、獣は神に敵対しながらも、神に許された範囲でしか活動できないということです。彼らは何でもできると豪語し、人々は獣（つまり地上の権威）が絶対であるかのように恐れます。しかしその首根っこはいつでも神の握られているということ。13章18節の獣の数字は「666」とあります。「それは人間をあらわしている」とあります。その心は、黙示録で7の数字は神の神聖を現す数字です。つまり、6の数は7に似ているように見える。神の支配のように絶対で永遠であるかのように見える。「ローマには日の沈むところなし」と言われたようにカエサルの権威は絶対で永遠に見えた。神の権威であるかのように見えた。ところが「7」ではないのです。1引いた6。つまり不完全なのです。「666」の意味するところは、トリプル不完全だということです。からだを殺せても魂は殺せない、むしろたましいもかただもゲヘナで滅ぼすことの出来る方を恐れよ、とある主の言葉のように、

獣の権威には限定があり、主の権威に似せようとはするが似ても似つかない。人間の支配にすぎないものです。

それに対する主の聖徒たちの戦いと抵抗は、いつも絶対である「7」の支配を行うキリストに従うものです。それは不服従、抵抗という形においても表され、またはまことのキリストの愛の支配を行うという積極的な形においても現れます。つまり聖徒たちの戦いは、キリストへの服従そのものなのです。使徒たちのユダヤ最高議会への抵抗の根拠が「人に従うより神に従うべきです」であったのと同じです。その意味で13章7節で獣に打ち負かされ、剣で殺された聖徒たちの姿は、12章11節に「自分たちの証しのことばのゆえに竜に打ち勝った」勝利者の姿でもあるのです。「彼らは死に至るまで自分のいのちを惜しまなかった」とある通りです。つまり聖徒たちは打ち負かされた勝利者なのです。キリストの十字架の足跡に従い続けた打ち負かされた勝利者なのです。

韓国の軍事政権の厳しい弾圧の中、抵抗を続けた池明倫先生が、今年天に召されました。終わりの見えない軍事独裁政権の下で、韓国の人々の身に何が起きているのかを伝え続ける「窓」となり、「韓国からの通信」を続けました。1月16日の朝日新聞の天声人語は次のように評しています。

「韓国の独裁は、異議や抵抗すら存在しなくなる全体主義にまでは至らなかったと著書で述べている。国民が闘い続けたこと、国際的な連帯があったことを理由にあげた。T・K生が開いた窓も、風を呼び込んだ▼香港、ミャンマー……。世界にはいまでも独裁政権による弾圧があり、外国に支援を求める人たちがいる。絶望することなく、思い起こした。韓国の軍事政権も倒れるまでは、極めて強固に見えていたことを。」